

ふつつかな新妻ですが。

～記憶喪失でも溺愛されてます!?!～

——すぐくすぐく悲しくて、つらくて、胸が痛い。

いまここにいることがたまらなく恥ずかしくなって、私は反射的に駆けだした。

どこへいくのかという問いかけと同時に、うしろから誰かの手が伸びてきて腕を掴まれる。

力まかせにその手を振り払う。とにかく、この場から逃げたかった。

さっき私がさらした醜態と、見透かされた浅ましい想い、それらをなかつたことにしてしまいた

い………！

やみくもに走りだしたせいで、足がフローリングの上を滑る。

バランスを崩したことに驚き、声を上げるよりも早く、左のこめかみに衝撃を感じてなにもかもが暗転した。

ふわふわした微睡みのなかで、ふと頭がひんやりしていることに気づいた。それだけじゃなくて、頭に鈍い痛みも感じる。

無視できない不快感に顔をしかめた。

これは風邪をひいたかな？ 起きて薬を飲んだほうがいいかもしれない……  
そこまで考えて瞼を開けると、見覚えのない白い天井が目映った。

ゆっくりと二度まばたきをして、まわりを確認しようとしたところで、右側にひとの気配を感じた。

そっと視線を右へ向ける。私が寝ているベッドの傍らに簡易的な丸椅子があり、そこに男性が座っていた。

……誰？

無地の白いワイシャツに、黒っぽいスラックスを身に着けている。背中を丸めて深くうなだれているから、顔は見えない。まっすぐな黒髪が額にかかっていた。

無遠慮な私の視線に気づいたのか、男性がパッと顔を上げる。

うわ、すっごく格好いい……！

綺麗なアーモンド形の目を思いきり見開いたそのひとは、続けて、いまにも泣きだしそうに眉根を寄せた。

「ああ、気がついてよかった。きみにもしものがあつたら、どうしようかと……っ」

男性は言葉を詰まらせ、私の右手を強く握り締めてくる。

「ひゃあっ……！」

思わず声を上げてしまったけど、その手を振りほどくことができない。彼の手は、蒼い顔と同じく血の気が引いていて、ひどく冷たかった。

年齢は二十代後半くらいだろうか。整った顔に浮かぶ苦しげな表情が痛々しい。まばたきをして何度か確認したものの、見覚えのないひとだった。

こんな素敵なひと、一度見たら忘れない気がするんだけど……

彼は私の手を、さも大事そうに握り続けている。その状況が急激に恥ずかしくなり、ドキドキしているのを悟られないように、こっそりともう一度彼を見た。

まったく状況がわからないけど、彼は私のことを心配してくれているらしい。ありがたく思いながら、事情を聞くために身体を起こそうとすると、優しく肩を押さえられた。

「まだ安静にしていなければだめだよ。いま看護師さんを選んでくるからね」

男性は柔らかく微笑んで立ち上がる。

看護師さん!? ということは、ここは……

突然飛び出した予想外の言葉にぎよっとして、離れかけた彼の手を、私のほうから掴んで引き留めた。

「あの、ここ病院なんですか？ 私、どうして……」

混乱したまま問いかける。彼は少し困ったように眉尻を下げて、浅くうなずいた。

「きみは家で転んで頭を打ったんだ。それで意識を失ってね。俺が救急車を呼んで、この病院に連れてきてもらったんだよ」

「救急車!?!」

かなり大事になっていると知って目を剥く。

転んで救急車で運ばれるほどの怪我をするなんてよっぽどだ。それに、彼はどうして家にいた私を助けてくれたのだろう。面識はないはずだけど……

全然身に覚えがない。まるで他人事みたいだ。

無意識に空いているほうの手で自分の頭を触ろうとすると、指先がぶよぶよした冷たいものに当たった。驚いて手を引つ込めたのに合わせて、男性がすばやく首を横に振る。

「あ、触らないで。ぶつけたところを氷嚢で冷やしているから。こぶができているんだ」

「そうなんですか」

かなり強く頭を打ちつけたようだ。さつきから続く鈍い痛みはそのせいらしい。

男性が「それじゃあ、ちよつと待っていて」と声をかけてくる。

私はそつとうなずいて、ぎこちないながら笑みを浮かべた。

「すみません、ありがとうございます。……あつ、でも、先にあなたのお名前を聞いてもいいですか？」

いまさら男性の素性を知らないことに気づいて、慌てて呼び止める。

すると男性は、信じられないものを見たようにスツと表情を消す。そして、かすれた声で

「えっ」と呟いた。

あれ、私にかまずいことを言っちゃったのかな？

彼の顔が、みるみるこわばっていく。

「俺のことがわからないの？」

「え、えーと、はい。ちよつとぼーつとしてて、思い出せないというか……」

男性の態度からすると、彼は私と近い間柄なんだろう。でもまったく覚えていない。

私の返事を聞いた彼はさらに顔色を悪くして、自分の額を手のひらで覆った。

「……そんな、まさか。他は？ 他にわからないことはある？」

「他について……、あれ？ 私……」

男性に促され、自分の記憶をたどろうとする。けど、頭のなかが真っ白でなにもわからない。

彼の素性どころか、自分の名前も、家族のことも、住んでいる場所も、勤め先もすべて思い出せないことに気づいて、ゾツとした。

「嘘……私、どうしよう……なにも……」

無意識に身体がガタガタと震えだす。視線をさまよわせ、必死に自分のことを思い出そうとするけど、記憶の欠片さえ浮かんでこなかった。

「なんで……!? なにも、思い出せない……私の、名前は？」

冷や汗が流れて、呼吸が浅くなる。

怖い。不安でたまらない。誰か助けて——！

居ても立ってもいられずに上半身を起こすと、こめかみがズキッと痛んだ。

「いっ!!」

思いきり顔をしかめ、頭を手で押さえる。

ぐらりと身体がかしいだのに合わせて、男性が「危ないっ」と声を上げた。

すかさず温かいものに抱き留められる。寄りかかったそれが男性の腕だと気づいて、私は必死で彼にすがりついた。

その瞬間、たとえようがないくらい安心感に包まれて驚く。よくわからないけれど、懐かしいような、波立った心が落ち着くような不思議な感覚だった。

私の名前は梶浦花奈……というらしい。

年齢は二十一歳で、派遣会社に所属して事務系の仕事をしながら主婦をしていたそうだ。

自分のことだと思えない情報を反芻しながら、私は隣に座る男性をそっと盗み見た。

彼は梶浦光琉さん。聞いたところによると、三十三歳で半導体メーカーの企画部システム技術開発課課長を務める会社員。

自宅で転倒した私を病院へ連れていき、ずっと付き添って看病してくれたひと。つまりいっしょに暮らしている家族で、同じ苗字からわかるとおり、二ヶ月前に結婚した私の旦那さんだという。

結婚……旦那さん……

最初にその話を聞いた時は、驚きすぎて、ベッドから転げ落ちそうになったほどだ。光琉さんが支えてくれたから、二つ目のたんこぶを作ることにはなかったけれど。

本当に私たちは結婚しているのかと、何度も光琉さんに確認してしまった。彼がいない時に看護師さんにも聞いてみたけど、みんな口を揃えて事実だと言う。だからようやく納得したものの、如何せんまったく実感が無い。

光琉さんはとても格好いい。性格だつてすごく優しいと、かかりきりで看病してもらったこの三日間でわかつている。本当に旦那さんだとしたら、私にはもったいないくらいの一ひとだと思っ。でも、やっぱり現実味がなくて……全部、私の妄想だつたらどうしよう!?

病院から自宅へ戻るタクシーのなかで、私は気づかれないように小さく溜息を吐いた。

この状況自体が夢なんじゃないかと思ってしまうくらい、自分自身のことごまかたくわからない。それだけじゃなく、いままで私に関わったひとのこと、私との関係も思い出せない。

芸能人の顔や名前、ものの呼び名、日々の生活の仕方などはわかるのに、自分とまわりのひとの情報だけが記憶のなかから、すっばり消えていた。

私の混乱がひどかったのもあって、念のために三日間入院していろいろな検査をしたけど、脳に大きな損傷はないらしい。

お医者さんは『転んだ時に頭を打ったショックで記憶が混濁しているのか、なにか別の心理的なストレスで健忘が引き起こされているのか、またはその両方かもしれない』と言っていた。

なにせよ特効薬などはなく、自然に記憶が戻るのを待つしかないそう、退院して自宅へ戻るように言われてしまった。

自宅と言われたつて、なにも覚えていない。光琉さんとふたりで、マンションに住んでいるそうだけど……

いま頼れるひとは光琉さんしかないから、面倒はかけたくないと思いつつも、お世話になる他に道はなかった。

ああ、記憶を取り戻したい。こんな私にも優しくしてくれる光琉さんのことを、早く思い出したいの。

「もうすぐ着くから。あの左側の角が俺たちの部屋だよ」

耳元でささやかれ、思わずビクツとする。

いま、『俺たちの』って言った……！

光琉さんからしたら、いつもと同じように私に接しているだけなんだろう。それなのにいちいち過剰反応してしまう。

きつと彼はそんな私に違和感があるに違いない。けれど、さも当然のように夫婦として振る舞われるとドキドキして仕方なかった。

胸の鼓動をなんとか鎮めて、前方へ目を向ける。少し先にある交差点の左に、グレーの外壁に覆われたマンションが見えた。

減速していくタクシーのなかから、建物を見上げる。

高さは十階くらいで、一階につき三部屋ずつあるようだ。ほとんど装飾のない外観が逆に洗練されているように見える。入り口の横の小さな花壇には真っ白な、凛とした雰囲気の花が植えられていて、暗い外壁とのコントラストが綺麗だった。

私としてはもっと甘い感じの花が好きだけど、このスタイリッシュな建物には合わないだろう。

ふいに横から、かすかな笑い声が聞こえてくる。振り向くと、光琉さんが目を細めていた。

「花、好きなの？」

「あ、はい。色が綺麗だから……」

「うん。でも白よりピンク色の花のほうが好きなんだよね」

「えっ」

答えを先まわりされ、目を見開く。驚く私を見た光琉さんは、いたずらっぽい笑みを浮かべた。

「少し前に、ここで同じ話をしたから。きみはあそこの花壇を見て、自分の好きな花はピンクだけど、ここには合わないかもって言っていたよ」

いま自分が感じたことを言い当てられ、思わず口をつぐむ。まるで心のなかを覗かれたようで、なんだか恥ずかしくなった。記憶がなくなっても、好きなものや、感じ方は変わらないらしい。

それに、こうした会話を過去にしていたということは、ここで光琉さんと暮らしていたのも事実なんだろう。

騙されているかもしれないと疑っていたわけじゃないけど、あらためて私と彼が夫婦なのだと思きつけられ、ますます緊張してしまった。

交差点を少し過ぎたところで、タクシーから降りる。

もう一度、自宅だというマンションを眺めてみたけど、やっぱりなにも思い出せない。光琉さんの案内で建物のなかへ入っても、私の記憶はひとつも戻ってこなかった。

シンプルでおしゃれなエントランスを抜けて、エレベーターで上階へ向かう。

たぶんデザインーズマンションと呼ばれる建物なんだろうけど、外観同様になかも素敵で、少し気後れしてしまった。

私と光琉さんの家は、七階の西側の部屋だという。南側のリビングと、続き間になっている四畳半の畳スペース。それと広めの寝室があるそうだ。

光琉さんが独身の頃から住んでいたところで、そこへ結婚を機に私がやってきた——なんて話を聞きながら、部屋のなかに通される。

玄関に立った瞬間、いやな胸騒ぎを覚えて、ぞわりと肌が粟立った。

「あ……なんか、ちよつと……」

とつさに背中を丸めて、服の上から胸元を手で強く押さえつける。理由はさっぱりわからないけど、ただ「怖い」と感じた。

先が上がっていた光琉さんが振り返り、心配そうな表情で見つめてくる。

「もしかして、転んだ時のことを思い出した？　ちよつとここで滑って、壁に頭をぶつけたんだよ」

この場所で怪我をしたと言われても、やっぱりその時のことは思い出せない。私は不快感を払いたくて、ゆつくりと首を横に振った。

「わかりません。けど、怖いような感じがして」

「うん。思い出せないだけで、あの時の記憶がどこかに残っているんだろうね」

光琉さんの言葉に、浅くうなずく。頭の傷はたいしたことがなかったけど、記憶を失くすくらいだから、相当恐ろしかったはずだ。

大きく息を吸って吐き出す。なんとかして胸の奥のざわつきを鎮めようとしていると、サッと目

の前に影が差した。

不思議に思っ顔を上げると同時に、強く抱き締められる。

「えっ。み、光琉さん……!?!」

光琉さんのぬくもりと、鼻をかすめる彼の香りに包まれる。突然の触れ合いに心臓が跳ね上がった。

「大丈夫。そんなに怯えなくていい。きみは俺が守るから、なにも心配いらナイよ」  
大丈夫、と言われても……!

身体が、ガチガチに固まる。けれど、不思議と嫌な感じはまったくなかった。

高鳴る心臓の鼓動が伝わってしまいそうで、恥ずかしくてなにも言えなくなる。

光琉さんは何度も「大丈夫」と繰り返しながら、私の髪を撫でてくれた。

無意識に感じた恐怖と、抱き締められた驚きでせわしなくなっていた鼓動が、彼の優しさに触れたことで鎮まっていく。

そればかりか、耳元で聞こえる低い声が心地よくて、いつの間にか自分から彼にすがりついてしまっていた。

しばらくすると、まるで終わりを告げるように、光琉さんが私の頭のとっぺんに口づける。  
「あ……」

記憶を失う前なら、キスなんて普通のことだったんだろうけど、すごく恥ずかしくて耳が熱くなった。過去をなにも覚えていない私にとっては、いまのがファーストキスのような感覚だ。心臓

が破裂してしまふんじゃないかと思うくらいドキドキが激しい。

「さあ、なかに入ろう。……ずっとこうしていたいけど」

光琉さんは一旦そこで言葉を区切り、私の手を取り奥へと引っ張っていく。

『ずっとこうしたい』なんて……！

光琉さんは甘いセリフを当然のようにささやくけど、記憶を失う前の私たちの新婚生活とは、いったいどんな感じだったんだろう。こんな状況では、心臓がいくつあっても足りないと思う。以前の私は普通に生活できていたのか、不思議でならない。

「きみが帰ってきたことを報告しなければいけないからね」

光琉さんの意外な言葉に顔を上げる。

確か、私たちはここでふたり暮らしをしていると聞いたけど、今日は他に誰かいるの？

彼に手を引かれて廊下の先のドアをくぐると、そこは日当たりのいいリビングだった。左側にキッチンスペースとカウンター、正面には大きな窓がある。右側には、すりガラスで目隠しされた格子戸がついていた。

太陽のまぶしさに目を細くする。日向の匂いに混じって、かすかなお線香の香りがした。

光琉さんはリビングを素通りして、格子戸に手をかける。

「こつちだ。きみがない間、お仏壇の手入れはしておいたけど、きちんとできていなかったら謝るよ」

一度振り返って苦笑した光琉さんが、格子戸を開けた。

ぐっとお線香の香りが強くなる。なかを見ると床に琉球畳が敷かれていて、部屋の隅に質素な仏壇があった。

光琉さんが仏壇の前に正座したので、私も彼の隣に座る。

飾りの少ない仏壇のなかには小さな写真立てがふたつ並べてあり、それぞれに男性と女性が写っていた。

「きみのご両親だよ。お父様はきみがまだ小さい頃に亡くなられたと聞いている。お母様は二年前にね……」

お線香に火を灯しながら、光琉さんが説明してくれた。

「そうなんですか」

立ち上る煙の向こうの写真を、まじまじと見つめる。父親だという男性には見覚えがないけど、女性のほうは鏡で見た自分の顔によく似ていた。私は母親似なんだろう。

光琉さんが鳴らしたりんの音に合わせて拝む。

このひとたちは私を生んで育ててくれたのに、顔も名前も思い出せない。自分がひどく薄情な人間のように思えて、心のなかで深く謝った。

少ししてから目を開けると、光琉さんが足を崩して私のほうに向き直っていた。

「……病院では込み入った話がでなかつたけど、きみはお母様が亡くなられた時に、通っていた大学を辞めて、そのあと派遣会社で働き始めたそうだよ。それで、俺の職場に事務員としてやってきたんだ」



光琉さんはそこで一度言葉を切って、少し照れくさそうに首のうしろを撫でる。

「伊敷さんは……ああ、きみの旧姓だけど……本当に仕事に対して一生懸命だね。面倒な業務を頼んでも、いやな顔ひとつしないで引き受けてくれたよ。朗らかでいつもニコニコしていて……いいなあと思っていた。年甲斐もなく、ね」

ちよつと自虐的なことを言いだした彼に向かって、慌てて首を横に振った。

「年甲斐がないだなんてそんな……光琉さんは優しくして、すぐ素敵ですっ」

実際、光琉さんは実年齢よりも若く見える。背が高く細身で、いまでもカジュアルな服を颯爽と着こなしていた。

少し長めの前髪をサイドで分けているのも清潔な感じがするし、なにより誠実そうな雰囲気がい。

記憶が不確かな私でも、彼が格好いいことはわかる。平凡な自分にはもったいないくらいの一ひただというのは、間違いなかった。

私の力説を聞いた光琉さんは驚いたように目を睨り、次にパツと顔をそらす。彼の目元が赤く見えるのは、たぶん気のせいじゃない。

「あ、いや！ 光琉さんが素敵なのは、事実なんですけど、その……」

つられたように私も恥ずかしくなって、うつむいた。

彼どの思い出はこの三日分しかないけれど、とても素敵なひとだということはよくわかった。お荷物でしかない私にも優しく、時々からかうようなことを言ったりもするけど、いつも私を笑顔

にしてくれる。無意識のうちに、どんどん惹かれていく自分がある。以前の私も、こんなふうになに惹かれていたのかな、と思う。

私がそんなことを考えていると、仕切り直すと言わんばかりに、光琉さんが小さく咳払いをした。「だから、まあ、そういう下心が全然なかったとは言わないけど、だんだんきみといっしょに仕事をするが増えて、それで、その、いろいろあって二ヶ月前に結婚したんだよ」

いろいろ。いろいろって、なに……？

お付き合いをしていた頃のことや、結婚を決めた経緯も聞いてみたかったけど、光琉さんはまたわざとらしく咳をして、話を打ち切ってしまった。

顔を上げて彼を見ると、目元だけじゃなく耳まで赤くなっている。彼は思ったよりシャイなひとなのかもしれない。

——正直なところ、私たちが夫婦なのだと言われても、まだ納得しきれない気持ちのほうが強い。でも、恥ずかしそうな光琉さんを前にして、これ以上詮索するのが申しわけなくなってきた。だいたい、彼との関係を否定する根拠もない。ただなんとなくしつくりこないというだけ。

私は違和感の原因を、記憶喪失で混乱しているせいだと決めつけて、うなずいた。

「わかりました。それで、これからどうしたらいいんでしょうか？」

お医者さんは『普通の生活をして構わないが、無理をせず、できるだけストレスがかからないように』と言うだけで、具体的な指示をくれなかった。

普通の生活と言われても、私にはその普通がわからない……

思わず、すがるような視線を光琉さんに向けて、彼は静かに微笑み返してくれた。

「少し家でのんびりしたらいい。さっきも言ったけど、きみはちよつとがんばりすぎてしまつてころがあつたからね。仕事は退職扱いにしてもらつたし、家事のことも気にしなくて大丈夫だよ」

「……でも」

確かにすぐ職場復帰をするのは無理だ。自分がどんな仕事をしてたのか思い出せないし、関わりがあつたひとのことも覚えていない。

だからといって、ただ光琉さんに甘えるのは気が引ける……

なにか私にもできることはないかと考えていると、クスツと笑われた。

「もしかして、俺の家事の腕を疑っている？ 結婚したあとはきみにほとんど任せていたけど、独身時代が長かったから、だいたいのはできるんだよ。それに妻を養えるくらいの収入もあるしね。と、まあこれはちよつとした自慢だけだ」

冗談めかした言い方に面食らう。

そういうことじゃないと声に出しかけたけど、伸びてきた光琉さんの手に優しく頭を撫でられ、口をつぐんだ。

う、わあ……

また心臓がせわしなく鼓動を刻みだし、痛いくらいだ。全身が熱くて、きつと耳まで真つ赤に違いない。

「きみが自立した女性だということはわかつているよ。でも、こんな時くらいは頼つてほしいな」

光琉さんの温かい気遣いを感じて、きゆうつと胸が痛む。

夫婦なら助け合うのは当然のことなのかもしれないけど、嬉しくて泣きそうになった。

もう一度、ゆつくり私の頭を撫でたあと、光琉さんの手が離れていく。少し寂しく感じて彼を見つめると、なにかを思い出したように「あつ」と短く声を上げた。

「ひとつだけ、きみにしてほしいことがあつたんだ」

「え。なんですか？」

こんな私でも、できることがあるらしい。思わず身を乗り出したところで、私の口元を指差された。

「その話し方をやめてくれないかな？ 夫婦なのに敬語って、ちよつとよそよそしい感じがしてね」

「あ……」

とつさに両手で口を覆い隠す。

確かに、他人行儀かもしれない。

だけど、緊張する。彼は私よりうんと年上だし、そんなひとと気安く話してもいいの？

でも、でも、でも……

しばらく逡巡してから、ようやく覚悟を決める。正直に言うと、彼にもつと近づけることに嬉しさもあつた。

「ん……うん。えと、光琉さんには、敬語をやめるね？」

変にドキドキしながら話しかける。

光琉さんは満足そうに笑ってうなずいたあと、なにかを考え込むように難しい顔をした。

「本当は名前も呼び捨てがいいんだけど」

そ、それはハードルが高いです！

両手をじたばたさせて慌てる私を見た彼は、気持ちを探してくれたようでこうつけ加えた。

「それはまあ、慣れてからでいいよ。俺もきみのことを名前で呼んでいいかな？」

「はい。あ、うん」

無意識に飛び出した丁寧な物言いを、慌てて言い直す。

いつか、彼を呼び捨てにする日は来るのだろうか。まったく想像がつかないけれど、そんな時が来たらいいなと思う。

そういえば、記憶を失う前の私はどうだったのだろうか？

優しげに目を細めた光琉さんは、私の手を取り、まっすぐに見つめてきた。

「それじゃあ、あらためてよろしくね。花奈？」

自分の名前を呼ばれた途端、心臓が大きく震えた。恥ずかしいのに嬉しくて、胸が高鳴る。

ただ名前呼びをされただけで、どうしてこんなにドキドキするんだろう。記憶がなくても本能的に光琉さんのことを覚えているのか、それとも格好いい彼を前にして舞い上がっているだけ？

……どちらにしても恥ずかしくて、頬が熱い。

私は赤くなっているはずの顔を見られないように、うつむいたままうなずいた。

## 2

病院から退院してきた時には、どうなることかと思っただけど、その後の私と光琉さんの生活は穏やかだった。

初めの一週間は私が混乱していたこともあり、家事のすべてを光琉さんがやってくれた。

彼自身が『だいたいのことはできる』と胸を張っていたとおり、掃除、洗濯、お料理も文句のつけどころがない。私は完全にお客様状態で日がな一日をぼんやりして過ごした。

彼との生活はドキドキの連続ではあるものの、そのうち記憶がない状態自体には慣れて落ち着いた。二週間が過ぎたいまは家事を分担制にしている。

平日の担当は私、休日は光琉さん。

平日は仕事へいき、週末に家のことをするのでは彼の負担が大きいように感じる。しかし、光琉さんの『休みの日くらいは、花奈にいいところを見せたい』という、よくわからない理由で押しきられてしまった。

休日の今日は光琉さんが張りきって家事をしていた。

スタイルがいい彼は、どんな姿でも様になる。いまは白いシャツにダークブルーのエプロンをつけているから、スマートさが際立って見えた。

ダイニングテーブル代わりのカウンターに頬杖をついて、光琉さんを眺める。

まぶしいくらいに格好いい。彼が私の旦那さんだなんて嘘みたい……

ぼんやりと光琉さんに見惚れていた私は、ハッと我に返って手元のアルバムへ視線を向けた。今日はなにもしないでのんびりするように言いつけられてしまったから、自分のアルバムを見ていたのだ。

表紙をめくったところには、産着にくるまれた赤ちゃんと、その子を抱く若い女性の写真がある。いまの私にそっくりだから、この女性が母親で写真の赤ちゃんが私に違いない。そしてその隣の写真に写っている男性は父親だ。仏壇に飾られている遺影と同じひとだった。

アルバムのページが進むにつれ、赤ちゃんはだんだん大きくなっていく。

私の家族は、おそらく写真が好きだったんだろう。記念写真だけじゃなく、なにげない生活のワンシーンを撮ったものも多い。その写真から、私たちが慎ましくも仲良く暮らしていたことが伝わってきた。私自身も写真が好きだったらしく、学校で友達といっしょに撮ったものもたくさんある。

記憶を失くしてしまった私には、このアルバムが自分と家族の思い出だと実感できない。それでも、過去の自分が穏やかで幸せな生活を送っていたと知って、少しほっとした。

長く息を吐いて、アルバムを閉じようとする。と、裏表紙に何枚か写真が挟まっているのを見つけた。

なにこれ……？

気になって見てみると、それは私が働いていた時の写真のようだった。

どこかのオフィスみたいなところで、スーツ姿の私と数人の女性が写っている。あとは、宴席の集合写真が二枚と、同じ会場らしきスナップ写真が四枚。そのなかに見慣れたひとを見つけて、私は声を上げた。

「あ……光琉さん」

「うん？ なに？」

「わっ！」

急に耳元で声をかけられ、慌てて振り向く。いつの間にかすぐうしろにいたらしい光琉さんが、息のかかりそうな距離で微笑んでいた。

驚いたのとドキドキしたのとで、かあつと顔が熱くなる。

「もうっ、びっくりした！」

わざと拗ねてみせると、光琉さんは軽く笑い声を立てて「ごめん」と謝り、私の手元を覗き込んだ。

「アルバムを見ていたの？」

「うん。なにか思い出せるかと思って。……だめだったけど」

いつも私を気遣ってくれる彼の前でこんな態度を取るのはいけないと思いつつ、つい声が沈んでしまう。この二週間、記憶が戻るようにと願いつけてきたけど、その望みは少しも叶わなかった。光琉さんは微笑んだまま少しだけ眉尻を下げて、私に寄り添い背中を撫でてくる。

「そんなに焦らないで。もう何度も言っているけど、無理に思い出さなくてもいいんだよ」  
彼の体温と優しい言葉に、また胸が高鳴る。私は小さくうなずいて、集合写真を指差した。

「ここに光琉さんが写っていたから、さつき名前を呼んでしまったの」  
私の言葉につられて写真を見た光琉さんは、楽しそうに目を細める。

「ああ、懐かしいな。これは花奈が入社した年の忘年会だ。ちょうどこの頃に退職する社員がいて、記念にみんなで撮ったんだよ」

「そうなんだ」

どういう状況で撮影されたものか説明されても、やっぱりピンとこない。私がこの写真をアルバムに挟んでいたのは、あとから整理して貼るつもりだったからだろうけど……

それにしても、就職してからの写真はこれだけなのかな？

写真好きだったっぽい私にしては、少ない気がする。だいたい、光琉さんと交際していた時のものが一枚もないのはおかしい。

「なんで私たちが付き合ってた時の写真はないんだろう？」

心のなかの疑問を、思わず口に出す。私の背中に触れる光琉さんの手が、ぴくりと震えた。

「ん……それは……俺がスマホで撮っていたから、かな。保存と現像をする前に、機械が故障して消えてしまったんだ。ごめん」

光琉さんは言いくそそうに、ぼそぼそと謝罪してくる。どうやら彼は、データが消えたことをひどく気に病んでいるようだ。

私は平気だという意味を込めて、首を左右に振った。

「そっか。残念だけど、故障なら仕方ないよ。気にしないで」

「うん……でも、本当にごめん」

光琉さんは絞り出したような声で、何度も謝ってくる。落ち込む彼の姿を見ているうちに、こっちまでつらくなってきた。ごめん。

私は光琉さんの顔を覗き込み、につこりと笑いかけた。

「もー、光琉さんの『ごめん』はなし！ 代わりに、これからまた写真を撮ればいいでしょ？」

光琉さんは私の提案に少し目を瞠ったあと、パッと笑顔になった。

「そうだね。じゃあさっそく撮ろうか」

「えっ、嘘。いま!？」

今日は光琉さんがどこにも出かけないと言うから、簡単なメイクしかしてないのに……髪だってきちんとセットしてないしっ。

彼は私が内心で慌てていることなんて気づかず、ぐつと肩を抱き寄せ、前方にスマホをかざす。

私たちが寄り添う姿を撮るつもりらしい。

最近の光琉さんはなにかにつけ私に近づき、触れてこようとする。彼のそばにいるのは安心するし嬉しいけど、やっぱり恥ずかしくて……

「さあ、撮るよ。花奈、笑って」

そんなことを言われてもドキドキしすぎて無理だ。顔がすごく近くて、少しでも動いたら頬が

くつついてしまえそう！

手のなかのスマホを動かしつつ「角度がいまいち」とか「位置がちよっと」とか言っている光琉さんの横で、私は顔をこわばらせて、ひたすらじっとしていた。

一週間後の金曜の早朝。

私は耳障りな目覚ましを止めて、寝返りを一度する。伸びをしながらかくびをして、最後に小さく溜息を吐いた。

朝、目が覚めて最初に気づくのは、今日の私が昨日と変わっていないこと。

光琉さんからは繰り返し『焦らなくていい』と言われている。でも、いまのままではなにかがよくないと感じていた。

それに、光琉さんと出逢ってから怪我をするまでの思い出を取り戻したい。

私たちが職場でどう過ごしていたのか、告白の状況と交際していた頃のこと、プロポーズの言葉や結婚生活……

記憶を失くす前の私は両親がいないのを引け目に感じていたらしく、あえて結婚式はしていないそう。光琉さんは私のわだかまりがなくなるのを待つと言って、結婚指輪も式ができるようになるまで作らないことになったという。

少しの間、天井を見つめて過去の自分を考える。けど、やっぱりなにも出てこない。二度寝を防ぐためにかけているスマホのアラームが鳴りだしたことに気づいて、身体を起こした。

アラームを解除したあと、手早く布団を畳んで片づける。押入れの下段に入れてあるタンスから洋服を出して着替え、部屋の隅の仏壇に朝の挨拶をした。

いま、私はリビングの隣の畳スペースにひとりで寝ている。光琉さんはリビングを出て廊下の先にある寝室を使っていた。

夫婦というのは同じ部屋で寝起きするものと思っていた。だけど、光琉さんに、眠れなくなるから別にしてほしいとお願ひされた。

彼は隣に誰かがいると眠れないタイプなんだろうか。それとも、寝ている時まで半病人の私の面倒をみたくない、とか……？

ふと湧いてきた自虐的な考えを、強く頭を振って追い払った。

「よしっ。朝ごはん作るうっ」と

独り言を呟き、立ち上がる。

今日は金曜だから、疲れぎみの光琉さんを元気づけられるように、気合いを入れて朝食を用意するつもりだ。

リビングへ続く格子戸を開けると、キッチンに置いてある炊飯ジャーが湯気を立てていた。部屋に広がるごはんの香りで、思わず頬がゆるむ。

とりあえず鮭と卵を焼いて、あとは青菜の混ぜごはんに、味噌汁は根菜を入れて具たくさんにしちゃおう。

朝ごはんのメニューを考えながら、南側のカーテンを開ける。朝の日差しを身体中に浴びて、ぐ

んと背伸びをした。

「んー……今日もいい天気！」

独り言を吹きながら、太陽に向かってにつこり笑う。と、すかさずうしろから腕が伸びてきて、私のお腹のあたりに巻きついた。同時に背中がぬくもりで覆われ、耳元には吐息を感じる。

「わっ……！ あ、もう。光琉さんっ」

「おはよう、花奈」

光琉さんは笑いを含んだ声で挨拶を返してくる。

彼はひとを驚かすのが好きなのか、時々こうして唐突に抱きついてくるがあった。

「温かくて気持ちいい」

「だ、だめだよ。ごはんを作らなきゃいけないんだから、放して」

「うん。それで今日はなにを作るの？」

はつきり放してほしいと言ったのに、光琉さんは私の願いを無視して話を続ける。もちろん、抱きついたままです。

彼にすれば夫婦の軽いスキンシップのつもりなんだろう。でも過去の記憶を失くした私には、ひたすら恥ずかしくてドキドキしてしまう。

それをごまかしたくて、さっき考えていたメニューを伝える。返事を聞いた光琉さんは「うーん」と短く唸り、私の頭のとっぺんに顎を乗せてきた。

「すっかり料理上手な花奈に戻ってしまって、嬉しいけど、残念だな」

「どうして？」

さらに光琉さんの身体が密着して、胸の鼓動が加速していく。荒くなりそうな呼吸を必死で整えて聞き返すと、彼は困ったようにふうっと息を吐いた。

「だって、俺が作る料理の適当なところがバレてしまうから。家事ができるいい男だと、花奈に思わせる計画が台無しだろう？」

光琉さんの立てたおかしな計画に、思わず嘔き出す。

「なにそれ」

「もちろん、花奈を惚れさせるための作戦さ。俺はずるい大人だからね。好きな女を落とすためなら、どんなことでも平気でするんだよ」

わざと意味ありげに「ふふふ」と含み笑いをした光琉さんにつられ、私も声を立てて笑う。ひとしきりふたりで笑い合ったあと、ふいに静寂がやってきた。

私も、光琉さんも、ただ無言で窓の外の景色を眺める。

ほんの少し、気まずい沈黙。いつもは冗談を言い合い、楽しく生活しているけど、時折なんとも言えない居心地の悪さを感じるがあった。

光琉さんといっしょにいるのがいやということじゃなく、ボタンをかけ違えたような違和感を覚える。それはきつと、私の記憶がないせいなんだろう。

優しい彼は『このまま記憶が戻らなくても構わない』と言ってくれている。でも、私は過去を思い出したい。

三週間いっしょに暮らしてきたなかで光琉さんに惹かれているのを自覚したからこそ、記憶を取り戻し、本当の意味で彼の奥さんになりたかった。

夕方、光琉さんが帰宅したのに合わせて、私は玄関へ出迎えに行く。

彼は『忙しい時や身体がつかい時は、迎えに出なくていいよ』と言ってくれるけど、私が一秒でも早く長く光琉さんといっしょにいたいから。

「光琉さん、おかえりなさいっ」

自分でも子供っぽいと思いつつも、嬉しくてつい声が跳ねてしまう。

落ち着いた調子で「ただいま」と返してくれた彼は、穏やかに目を細めた。

普通の夫婦なら、ここでキスをするのかもしれない。けど、光琉さんはただ微笑みだけ。私たちの間には、多少のスキンシップはあれど、この三週間キスはなかった。

優しい彼のことから、なにも覚えていない私を気遣ってくれているんだろう。

……照れくさくてつい緊張しちゃうけど、私はいやじゃないのにな。抱き締めて見つめ合い、唇を触れ合わせて、もつと先のことだつて……

頭のなかに浮かんだちよつとエッチな妄想で、かあつと頬が火照る。

実際に光琉さんと私がどういう行為をしていたのかはわからないけど、それはとても素敵で幸せなことのように思えた。

——三週間分の思い出しかないのに、こんな大胆なことを考えてしまう自分が信じられない。と

はいえ、それくらい強く本能的にも惹かれたからこそ、結婚を決めたのだとも考えられる。

ここ数日ほど、私は彼との関係を先に進めたい気持ちでいっぱいになっていた。どうすればもつと私を好きになつてもらえるのか、身も心も本当の奥さんになれるのか。あれこれ考えてばかりいる。

ひとりでその気になっていることが恥ずかしくて、目を伏せる。すると、なにかが擦れるような音に合せて、視界にピンク色のものが飛び込んできた。

びっくりしながら見ると、それは可愛らしいブーケだった。スイートピーとガーベラ、それにカーネーション、バラ……パウダーピンクからルビーレッドまで様々な色調の花が可愛らしくまとめられている。

すごく綺麗。だけど、どうしていまブーケが出てきたのかわからない。

パチパチとまばたきをしたあと、ブーケを持っている光琉さんへ目を向ける。彼は驚く私を見てニッコリと笑った。

「おみやげ」

「えっ……私に？」

「そう。会社の近くのフラワーショップに飾つてあつてね。花奈はこういうのが好きなんだろう？」

「あ、うん。好き、だけど……」

目の前に差し出されたブーケを、両手でおそろおそろ受け取る。間近で見つめると、甘い香りがふわりと鼻をかすめた。



キュッと胸の奥が甘く痛む。嬉しすぎて、どうしたらいいのかわからない。

なにも言えずに、眉尻を下げる。私の顔を覗き込んだ光琉さんが、不思議そうに首をかじげた。

「どうしたの。気に入らなかつた？」

「ううん、違う。すごく幸せで、泣いちゃいそう。ありがとう光琉さん」

いまさらお礼を言っていないことに気づいて、感謝の言葉を添える。

光琉さんは一瞬驚いたように目を瞠みはつてから「ははっ」と明るい笑い声を立てた。

「花奈は大げさだな。でも、そこまで喜んでくれて俺も嬉しいよ」

「……だって、本当に嬉しいから」

ブーケで口元を隠しながら、ぼそぼそ言いわけっぽいことを声に出す。口で感謝を伝えるだけじゃなく、抱きついてキスしたいという衝動に駆られた。

でも、それはできない。いまはブーケを持っていて手が塞ふさがっているし、なにより私のほうから行動を起こす勇気がまだなかつた。

抱き締めてくれないかなという期待を込めて、じつと光琉さんを見つめる。視線で訴える作戦だ。しかし私の拙たい誘いは彼に届かなかつたようで、ぼんぼんと頭を撫なでられた。

「さあ、なかに入ろう。今日の夕飯はなにかな？　すぐおいしそうな匂いがするけど」

「あ、えと、ハンバーグにしたの」

「それは楽しみだ」

ご機嫌な光琉さんに向かって、私も笑みを返す。幸せだけど少し物足りないと感じていることは、

心の奥に隠したままで。

ごはんを食べたあと、片づけをしている間に、光琉さんにはお風呂を済ませてもらった。

彼が上がる頃に合わせて片づけを終わらせ、続けて私が入る。

丁寧に身体を洗ってお風呂から出た私は、パジャマを着たあと、ギュッと自分を抱き締めた。

普段は寝る時も下着をつけているけど、いまはあえてブラをしていない。なんだか背中がスーするし、胸の膨ふらみが下に引つ張られているようで落ち着かなかつた。

……今夜はこれで光琉さんに色仕掛けというのをやってみるつもりだ。

昼にスマホのサイトを見まくって男性の好みを調べたところ、だいたいのひとは「おっぱい」と「チラ見せ」に弱いらしい。本当は「彼シャツ」というのが効果的だそうだけど、お風呂上がりに光琉さんのシャツを着るのは不自然すぎるので、ノーブラでパジャマの胸元を開けておく作戦にした。

パジャマのボタンを上からふたつ外して、洗面所の鏡を覗のぞく。幸い、胸は大きいほうなので、少腕を寄せると胸元に谷間ができた。

私にはこれのなにかさっぱりわからないけど、男性はこの谷間を見てドキドキするとう。首をひねりながら、もう一度鏡に目をやると、平凡な顔の女がこちらを見返していた。

特別、綺麗というわけでもない、パツとしない顔立ち。肌の色こそ白くて、胸はまあまあ大きいけど、いいところはそれだけだった。

……どうして、光琉さんは私を選んだんだろう？

もう何度も考えた疑問が、心の底から浮かんでくる。

彼は、職場で一生懸命に仕事をする私の姿を見て好きになったと説明してくれたけど、それ以外の話を教えてくれない。デートの思い出や、いつしよにいた時のエピソード、結婚までにどういいきさつがあったのか、私はなにひとつ知らされていなかった。

不安な気持ちだが、朝にテレビで観たワイドショーの煽り文句を思い出させる。今日の特集は「夫婦の離婚危機」だった。

さまざまなケースが紹介されていたけど、セックスレスから関係が悪化したパターンを目の当たりにして、震え上がった。

……この三週間「ただいま」のキスさえしない光琉さんが、エッチなことなんてするはずはない。私が記憶を失くしてからというものの、彼との触れ合いは、軽く撫でられるか冗談めかしたハグだけだ。

記憶喪失になる前の私と光琉さんが、どのくらいの頻度でどんなふうに抱き合っていたのかはわからない。でも夫婦として共に暮らしていくのならこのままでもいいわけがないし、私自身がもう我慢できそうになかった。

朝みたいなぎこちない空気を感じたり、彼が帰宅した時のように距離を置かれたり……そういうささいなできごとに、いちいち胸が痛む。

誰よりも近くで抱き締めて、私のなかにある不安を消してほしい。光琉さんと寄り添い、すべて

をさらけ出して結ばれたい。彼が好きだから。

そこで考えたのが、湯上がり色仕掛け作戦。

きつとこのままじゃ、光琉さんは私に手を出してこないだろう。ならば夫婦円満のために、私のほうから迫ってみようと考えたのだ。

ちなみに、今朝観たワイドショーのコメンテーターが『女性からもアプローチするべき』と言っていたのを見て思いついた。

私は胸の前で両手のこぶしを握り、大きくうなずく。正直に言えば恥ずかしくて、ちょっと怖いけど、光琉さんといっしょにいるためならなんでもできると思えた。

洗面所を出て、いざリビングへ！

揺れる胸を手で押さえつつ室内を覗くと、光琉さんは窓際に敷いてあるラグに座ってテレビを眺めていた。彼の左手に缶ビールが握られているのを確認して、心のなかでグツとガツポーズをする。

光琉さんは金曜の夜だけ、お風呂上がりに晩酌をするのだ。週末に一度きりなのは「仕事をがんばった自分へのご褒美と、実はあまりお酒に強くないから」らしい。

実際にいまもほろ酔いのように、テレビを見つめる目がとろんとしていた。あれなら私の誘惑に引っかけられるかもしれない。

気だるげな光琉さんの姿に、なんとも言えない色気を感じて、鼓動が速まる。私はこくと唾を呑み込んで、彼に近づいた。

緊張しすぎて頬がこわぼる。たぶん、手汗もすぐ出ているはずだ。

最初の作戦では「さりげなくそばに寄って胸を強調する」ことにしていたけど、ガチガチな私はあからさまに不自然な態度で彼の隣に座り、強引に身体を擦り寄せた。

「花奈？ どうしたの？」

光琉さんが驚いた声を出す。私は彼の腕にすがりつき、むりやり胸を押しつけた。

「き、きよ、今日はくつつきたい気分なのっ！」

思いきり囁んだうえ、声が裏返った。

恥ずかしすぎて顔が上げられない。作戦の第二段階である「色っぽく見つめて迫る」も失敗だ。

なにもかもうまくいかず、焦りがつのる。とにかく身体を密着させようと思い、体重をかけると、光琉さんが急に慌てた。

「ちよ、それ以上、押さないで。危な……！」

彼の声が途切れて、ガクツとバランスが崩れる。突然のことに声を上げる間もなく、私は前にかつて倒れ込んだ。

とっさに目を瞑る。続けて、どさつという鈍い音が聞こえた。

けつこう大きな音がしたけど、どこも痛くはない。光琉さんに怪我はないかと思い、顔を上げたところで、間近に視線を感じた。

見れば、仰向けで寝転がった彼に、俯せの私が重なっている。

慌てて退こうとしたけど、光琉さんが呆れ顔をしていることに気づいて、身体が固まってし

まった。

「花奈」

窘めるように名前を呼ばれ、ビクツと肩が震える。いくら温厚な彼でも、今回はさすがに怒っているらしい。

「う……ご、ごめ……なさい」

光琉さんを不快にさせたことが申しわけなくて、嫌われたかもしれないことが悲しくて、声がかすれる。こぼれそうな涙をこらえるために唇を囁むと、そっと頭を撫でられた。

「本当にどうしたの？ なんだか様子がおかしいよ。今日なにかあった？」

「怒って、ないの？」

不安な気持ちだが、思わず口をついて出る。

一瞬、驚いたように目を睜った光琉さんは、次に小さく笑い声を上げた。

「こんなことでは怒らないよ。ただ花奈を心配しているだけ」

どこまでも優しく温かい彼を前にして、ますます涙が滲む。私は目に浮かんだ涙を手の甲で拭き、朝に観たテレビの内容と、今回の作戦を立てた経緯を白状した。

時々あいづちを打ちながら話を聞いてくれた光琉さんは、最後に苦笑しながら私の耳を軽く引っぱった。

「まったく。そんな本当の話かどうかもわからないものに影響されて。花奈はいけない子だね」

「だって……」

確かにあの番組はセンセーショナルな見出しを掲げて、大げさに不安を煽っていたかもしれない。でも、私たちがセックスレスなのは事実だ。そしてそのせいで光琉さんの気持ちが離れてしまうことも絶対には言いきれなかった。

……実際、変によそよしい時だつてあるんだし……  
また目に涙が溜まる。光琉さんは親指で私の目を優しく拭つてくれた。

「そりゃあ全然我慢をしていないと言つたら嘘になるんだけど、ああいうのは無理にすることもできないと思うな。前にも言つたとおり、俺は独り身が長かつたし、もういい歳だからね。花奈が本当に大丈夫だと思えるまで、いくらでも待てるよ」

彼の思いやりに満ちた言葉に、一瞬、流されかける。でも、それじゃなにも変わらないと気づいて身体を起こした。

うん。やっぱり色仕掛け作戦を続行しよう。

光琉さんの身体を跨ぎ、おへそのあたりに座り込む。

私はどちらかといえば華奢なほうだけど、お腹の上に乗れば、いくら男性の彼でも思うように身動きが取れないはずだ。

「花奈？」

訝しげに名前を呼ぶ声が、下から響く。目を向けると、光琉さんは困惑した様子で眉根を寄せていた。

「も、もう大丈夫だから、待たなくていい」

恥ずかしくて、声が震える。首から上が一気に熱くなって、自分の激しい鼓動をうるさく感じた。光琉さんの身体にギュツと力が籠もる。信じられないものを見たように目を見開いた彼は、あからさまに顔をそむけて私を視界から追い出した。

「なにを言っているの。全然、大丈夫じゃないよ。花奈の記憶は戻っていないんだし……」  
えっ……!?

光琉さんの態度と言葉に、殴られたような衝撃を受ける。

「なんで、そんな……記憶が戻らなくても構わないって言つたのは、嘘だったの？」

私が記憶を失くしてからというもの、ほんの少しでもいいから過去のことを思い出したいと願ってきた。しかし、どれだけ強く望んでも、状態は変わらない。

自分のこと、親のこと、愛したひとのことさえわからないなかでなんとかやってこられたのは、光琉さんがいつも私に『焦らなくていい』『覚えていなくても大丈夫』と言い続け、安心させてくれたからだ。

……それが、全部、本心じゃなかった？ やっぱり記憶喪失になる前の私のほうがいいの？  
抑える間もなく両目から涙が溢れ、頬を伝い落ちていく。

彼のパジャマの胸元を強く握り締めた。力を入れすぎた手はブルブル震え、とめどなく流れる涙のせいで呼吸が苦しい。

必死で落ち着こうとしてもうまくいかずに、私は大きくしゃくり上げた。

その音で、光琉さんは私が泣いていることに気づいたんだろう。彼は慌てて前に向き直り、すば

やく首を横に振った。

「違う。それは嘘じゃない。記憶がなくても花奈は俺の妻だよ。ただ、きみは、俺たちがもともとどんなふうに住生活していたのかを知らないから——」

「だったら、教えてよ！ どうしてなにも言ってくれないの!? 私は……私は本当にあなたの奥さんのの?」

光琉さんがすべてを言い終える前に、心にわだかまっていた疑問をぶちまける。

紳士的で優しい彼に癒され、ほっとしていたのは事実だけど、同時になんとも言えない違和感も覚えていた。

光琉さんは、記憶がない私を変わらず愛していると言ってくれる。でもそれは言葉だけで、なにも確証がない。彼の言葉を信じたいからこそ、キスして抱き締めてほしかった。

私の下で苦しげに顔をゆがめた光琉さんは、片腕で目を覆い隠し、はあつと溜息を吐いた。

「花奈は、間違いない俺と結婚しているよ。寢室の書類棚に住民票の写しがあるから、それを見ればわかる。……ただ、実際にはまだ夫婦とは言えなかったんだ」

「え?」

「職場で花奈を見て惚れたのは本当。でも、きみは若くて、人気があつてね。年齢差に引け目を感じていた俺はかなり焦つていた。だから、恋愛に不慣れだというきみを強引に言いくるめて結婚したんだよ。朝に言っただろう? 好きな女を落とすためなら、どんなことでも平気でするって」

光琉さんの本音を聞き、胸の鼓動が激しくなる。

もしかしたら彼に対して腹を立てるところなのかもしれない。でも、光琉さんが本気で私を求めてくれたのだとわかり、嬉しくてたまらなかった。

「そうだったの」

「うん。だけど籍を入れて我に返った時に、いくらなんでも強引すぎたと後悔した。花奈はそれまで恋愛をしたことがなかったらしくて、本当に初心で純粹だったからね。それで、きみに手を出すことをためらっていたんだ」

さつき光琉さんが口にした『実際には夫婦と言えない』という言葉が思い出される。

「じゃあ、私たちは、もしかして……」

私の心のなかを読んだように、光琉さんが小さく「ああ」と呟いた。

「そうだ。きみを抱いたことはない。はつきり聞いたことはないけど、おそらくそういう経験がないんだと思う。だから、無理はしなくていい。花奈の心の準備ができてからでいいんだよ」

目を隠したまま、光琉さんは静かな声で私を諭す。それはきつと彼なりの思いやりと愛情に違いない。

光琉さんが私を大事にしてくれていることは本当に嬉しい。でも彼は大きな勘違いをしていた。

私が過去に他の男性と付き合ったことがないのは、たぶん事実だろう。エッチの経験がないのも本当だと思う。だけど、初心で純粹だったというのは思い込みだ。

私は記憶を失くしてしまったけど、一般的な知識は残っている。そこには性の知識も含まれていた。

つまり、いまエッチについて多少の知識があるということは、以前の私だって知っていたはずで、光琉さんの言うような『本当に初心で純粹』な女じゃないのは明らかだった。

光琉さんのなかの私のイメージが、どうしてそんな乙女チックなものになったのかはわからない。ただ、このままじゃいつまで経っても本当の夫婦になれないということは確実だった。

私はできるだけ音を立てないようにしながら、そっとパジャマの上着を脱ぎ捨てる。相変わらず顔を隠したままの彼に近づいて、鼻の頭に口づけた。

本当は唇にキスしたいところだけど、そこはさすがに恥ずかしいし、したことがないから失敗しそうで怖い。もう一度、今度は彼の手首に口づけると、光琉さんがかすれた声で私の名を呼んだ。

「花奈……?」

「光琉さんが好き」

緊張で震える心を奮い立たせて、想いを口にした。

私の告白を聞いた光琉さんは、おそろおそろという感じで目元を覆っていた腕をずらす。続けて目を開けた瞬間、ヒュッと息を呑んだ。

パジャマを脱いでしまったから、いま私は上半身になにも纏っていない。胸元どころか、膨らみの先までさらしていた。

心臓がドキドキしすぎて、身体中どこもかしこも震えている気がする。こわばる乳房と尖った先端もブルブルと揺れていた。

「……本当に好きだから、ちゃんと光琉さんの奥さんにして?」

重ねて想いを伝える。

どうしても私の気持ちをわかってほしくて、さらに身を乗り出したところで、光琉さんの両腕に抱き締められた。

「なんでだよ。記憶が戻ったら、後悔するかもしれないのに……!」

光琉さんはまるで独り言のように、つらそうな声を出す。私は内心で『ごめんなさい』と『ありがとう』と囁いて、首を横に振った。

「絶対に後悔なんてしない。私が光琉さんを好きな気持ちは本当なもの。それにね、いくら強引に迫られたからって、好きでもないひとと結婚はできないと思う。きつとうまく伝えられなかっただけで、記憶を失くす前の私もこうしたかったはずだよ」

なにも確証はないけど、不思議とそれが正解だと思えた。

光琉さんは私をきつく抱き締め直し、少し乱暴に「もうどうなっても知らないからな」と吐き捨てる。腕のなかに閉じ込められ、息苦しさに喘いだ私の口を、彼の唇が塞いだ。

私が無理を言ったせいで機嫌を悪くしたのか、光琉さんは普段の優しい態度からは想像がつかないくらい荒っぽく唇を重ねてくる。

驚いてとっさに逃れようとしたけど、いつの間にか彼の手で頭のうしろを押さえられていた。

すぐに息が続かなくなり、頭がクラクラしてくる。耐えきれずに口を開けると、待ち構えていたように光琉さんの舌がなかに入ってきた。

「ん、んっ、ふぁ……！」

一瞬、冷たく感じたけど、すぐにふたりの体温が混じり合いわからなくなった。柔らかく芯のある彼の舌が、私の口内でぬるりと蠢く。妙な寒気を覚えて震え上がった。うなじがゾクゾクしてたまらない。まるで、私の状態を見通しているように、光琉さんの手がそこを撫で下ろした。

反射的にビクツと身体が跳ねる。光琉さんは最後に音を立てて私の唇を吸うと、ふっと笑って顔を離した。

「気持ちよかった？」

「え……あ、わから……ない。ただ、ドキドキ、して……」

口を塞がれていたせいか、呼吸が苦しい。腫が潤み、顔も火照ってジンジンしている。

知らないうちに顎のほうまで唾液が垂れていたらしく、光琉さんが指で拭き取ってくれた。

彼は濡れた自分の指をわざとらしく舐めて、ニツと口の端を引く。

「そんないやらしい顔で息を切らしていたら、聞かなくてもわかるけどね」

初めて見た、いじわるそうな笑みに、また鼓動が速くなる。いつもと違う彼を少し怖いと思うのに、色っぽくて魅惑的な姿から目が離せない。

光琉さんは私をかかえたまま、身体を反転させた。いままでとは逆で、私がラグに組み敷かれてしまう。

ギラギラしたまなざしが胸に注がれているのを感じて、急に恥ずかしさが込み上げてくる。慌て

て手で隠そうとしたけど、光琉さんに手首を押さえつけられた。  
「自分から見せつけてきたのに、いまさら隠すの？」  
「う、だって……」  
言い逃れできない状況だということはわかっているけど、認めるのは居たたまれない。  
思わず目をそらすと、光琉さんは私の両手首を頭の上にまとめ、左手で掴み直した。そして空いた右手で私の鎖骨をなぞる。

「ちゃんと見て。花奈はこうされたかったんだろう？」  
光琉さんの声につられて、視線を胸元へ向けてしまう。私の見ている前で、胸の膨らみが彼の右手に覆われた。

「あっ」  
自分で触るのはまるで違う感触と彼の体温に驚いて、声を上げる。自然に、お腹の奥がキュツとすくみ上がった。  
光琉さんは膨らみの形を確認するように、手のひらで全体を丸く撫で、柔らかく握る。指先に少し力を入れては抜くのを繰り返し、優しく揉み始めた。

「綺麗で、柔らかくて、最高だ」  
「ん……あ、光琉さんは、おっぱい、好き？」

どんどん荒くなる呼吸の合間に尋ねる。  
ちよつとびっくりしたように眉を上げた光琉さんは、続けてクスツと笑った。

「そうだね。嫌いだって男はあんまりいないんじゃないかな」

内心でほっと息を吐く。男性がおっぱい好きだという情報は本当らしい。

笑いながらも、光琉さんは私の胸をやわやわと揉み続ける。乳房がじんわりと熱を持ち、先端が彼の手に擦れてむず痒く感じた。

「はあ、あ……ああん」

恥ずかしくていやなのに、漏れ出る声を抑えられない。

光琉さんは私の手首を放して、いままで触れていなかったほうの乳首を摘まみ上げる。途端にピリッとした痺れが走り、背中を反らした。

「やあっ！」

「気持ちいい？　ここ、ピンピンに尖っているけど」

とにかくむずむずして苦しい。でも、やめてほしくない。きっとこれが光琉さんの言う『気持ちいい』ってことなんだろう。

興奮で潤む目を彼に向けてうなづく。光琉さんはわずかに顔をしかめて、天井を仰いだ。

「あー……やばいな……」

「え？」

低い声でぼそぼそ言われたから、はつきり聞き取れなかった。反射的に聞き返したけど「なでもないよ」と返される。

彼はそれ以上にも言わずに、摘んだ乳首を刺激し始めた。

指先で軽く押し込むようにしながら、くりくりと転がされる。てっぺんを擦られるたびに、今まで感じたことのない強く甘い痺れが湧き上がった。

「ひっ、んん、ん……っ」

喉の奥からせり上がってきた声を嘔み殺し、手で口を覆い隠す。

光琉さんは必死で声を抑える私を見て、また悪そうな笑みを浮かべた。

「声、我慢しなくていいのに。俺としては花奈が可愛く啼くところを見たいんだけどな」

そう言われても、素直には応じられない。自分がこんないやらしい声を出すなんて信じられないし、恥ずかしすぎる。

口元を隠したまま首を横に振ると、光琉さんはどこか嬉しそうに笑みを深くした。

「そう。じゃあ我慢しきれなくなるくらい、もっともっと感じさせてあげないといけないね」

え、なに……？

すごくいやな予感として身を縮める。

光琉さんは、私の両方の乳首を、それぞれ三本の指で同時に捏ねだした。

左右の膨らみからピリピリした感覚が広がっていく。片側だけでも苦しいと思ったけど、両方をいっぺんに刺激されるのは、じっとしていられないくらい強い快感だ。

ぐっと体温が上がり、ますます呼吸が激しくなる。軽い酸欠に陥った私は苦しさに耐えきれず、手を除けて大きく息を吸い込んだ。

無防備になった口から、切れ切れに喘ぎが溢れ出す。



「んっ、はあ、ああ……あんっ……光琉さ、いつしよに、したら、だめえ……！」

左右に大きく頭を振って、つらいと訴える。けど、光琉さんは楽しそうに目を細めただけで、手の動きを止めてはくれなかった。

「花奈は感じやすいんだな。ちよつと触っただけでこんなになつて」

「や、だ……そんな、こと……」

まるで「いやらしい」と非難されたように思えて悲しくなる。必要以上に清純と決めつけられるのは困るけど、逆にエッチなことが大好きだと思われるのもいやだ。

思わず感情を顔に出してしまう。目を合わせた光琉さんは、左手をラグに移して身体を支え、私の額に口づけた。

「感じやすいのはいいことなんだよ。花奈が気持ちよくなってくれれば俺も嬉しい。だから、いっぱい感じて、乱れてみせて」

「あ、んう……」

私が次の言葉を紡ぐより早く、キスで唇を塞がれる。

初めのキスと同じようにしつこく口の中を舐められ、光琉さんが離れる頃にはぐったりとしてしまった。

光琉さんは右手で私の胸を弄ひながら、顎の下、首筋、鎖骨へと唇を落とす。ただ触れただけのキスなのに、ひどくゾクゾクする。

くすぐったいはずの感覚が気持ちよくて、私ははしたない声をこぼしながら身体を震わせた。

やがてたどり着いた胸元に軽く歯を立てられる。

「やつ、あ、光琉さん……！！」

そんなにきつく噛まれたわけじゃないんだけど、熱に浮かされているなかで異質な痛みを与えられ、驚いてしまった。

私の意識が噛まれた場所に集中する。光琉さんはまるでそれを狙っていたように、私の乳首に吸いついた。

「ひああっ！」

指でいじられるより何倍も強い快感が噴き出る。彼はそこを一度強く吸ったあと、舌を巻きつけるように舐め上げ、次に唇で挟んで強めに扱った。

ふわふわした甘さと、痛みに近い痺れを交互に感じて、私は身をこわばらせる。もう一方の乳首も同じように指で刺激されていた。

胸の先から溢れた痺れは全身をめぐる、足の付け根を熱くする。

そこは光琉さんを受け入れるための場所。まだ胸をいじられただけなのに、身体は早くも先を期待して震えていた。

膨らみへの愛撫が激しくなるに従い、下腹部の熱も上がっていく。ちよつとしつこいくらいに胸を苛まれ、私はいつの間にかラグに足を突っ張り、腰をくねらせていた。

恥ずかしいし、いやらしいと思うのに、動きが止められない。なぶられ続ける胸と同じに、秘部がジンジンしてたまらなかった。

熱を放ち、ひくつくそこを擦って、疼きを鎮めてほしい。

「あ、も、もう、やだあ。胸だけじゃ、いや……」

我慢しきれなくなった私は半泣きで首を左右に振る。

光琉さんは私の胸元から顔を上げ、スツと口の端を上げた。

「……他に、どこをいじってほしい？」

「そ、それは……」

とっさに口箆もる。いくらなんでも、その場所を口にすることはできない。

普段と違って、いまの光琉さんはいじわるだ。私が望んでいることなんて最初からお見通しのはずなのに、彼はわざとらしく首をひねるだけだった。

「ちゃんとやらないとわからないよ。それとも、指で差して教えてくれる？」

どうしても、いじってほしいところを私から伝えなければいけないらしい。

私はきつく目を瞑って恥ずかしさを振り切り、ラグに投げ出していた手をそろりそろりと秘部へ向けた。

「ここ、を、触って……」

「こう？」

身体を起こした光琉さんは軽い調子で返事をして、私の足の付け根にぺたりと手のひらを載せた。パジャマごとに、ほんのりと彼の体温を感じる。けど、望んだような刺激は与えられなかった。

「ち、違うの。もっと強くして……服の上からじゃなくて、胸をいじった時みたいに」

体内でくすぶる熱に突き動かされ、次々といやらしい願いを口にしていく。閉じた瞼の向こうに視線を感じて目を開けると、光琉さんの熱いまなざしが注がれていた。

「直接触ってほしいなら、自分で脱いで」

ギラギラした光琉さんの目がパジャマのズボンに向けられる。

私はまるで操られているみたいに、ウエストへ手を伸ばし、ズボンをゆっくりと下ろしていった。

「あ、あ」

ただ服を脱いでいるだけなのに、息が切れ、私の口から喘ぎが漏れる。

ズボンとショーツをまとめて太腿まで下ろしたところで、足の付け根に冷たい空気を感じて身震いした。

軽く首をかしげた光琉さんが、私の秘部を覗き込む。

「濡れているね」

「えっ、あ……み、見ないで」

思わずギュッと足を閉じる。この状況で隠すのはおかしいと自分でも思うけど、恥ずかしい。

光琉さんも同じように感じたらしく、クスツと笑い声を立てた。

「そんな無茶を言われてもね。そこをいじってほしいなら、足を開いて全部見せなさい」

「う……」

きつぱりと命令されて、また身体の熱がぐっと上がる。光琉さんは私を急かすように手早くズボンとショーツを抜き取り、ぽいっと放り投げてしまった。

「糸纏わぬ姿になった私は、のろのろと足を開いていく。やつと肩幅くらいまで開いて溜息を吐くと「もつ」と指示された。」

「膝を立てて。奥まで見えるように」  
「やあ……恥ずかしい……」

立て続けに与えられる命令に泣き言が漏れる。

光琉さんは口元に笑みを浮かべたまま、スッと目をすがめた。

「その恥ずかしいことがしたいって最初に迫ったのは花奈のほうだよ。それに、いやがるどころか気持ちよくなっているよね？」

鋭い指摘にピクツと肩が震える。彼の言うとおり、私の疼きはひどくなる一方だった。

光琉さんに言われるまま、左右に大きく足を広げた。

開ききった秘部は、見られていることを意識してひくつき、新たな蜜をこぼす。伝い落ちていくその雫を、光琉さんの長い指がすくい取った。

わずかに触れられただけでも、大げさに反応してしまう。息を呑み震える私の目の前で、光琉さんは蜜にまみれた指先を咥えた。

「あ、やだ。そんなの、舐めるなんて……！」

思わず目を見開いて、制止の声を上げる。まさか口に入れるとは思っていなかった。

驚く私を見た光琉さんは、口から指を離して、おかしそうにふつと笑う。

「どうして？ 花奈を味わいたいのに」

「なに、言って……だ、だめだよ、汚いから」

さっきお風呂で綺麗にはしたけど、秘部から溢れたものを口にされるのは、やつぱり抵抗がある。頑なに拒否すると、光琉さんは手の甲で口元を乱暴に拭い、はあつと息を吐いた。

「だめと言われると余計にしくなるんだけどな。それとも俺を煽っているの？」

「え？」

なにを言われているのかわからずに、目をまたたかせる。

一生懸命どういうことか考えようとしたけど、答えが出るより先に、光琉さんの左手で右足をぐいと持ち上げられてしまった。

「あっ！」

膝の裏を掴まれて押し上げられたから、足が自由に動かせない。

なにごとかと慄く私に構わず、光琉さんは秘部に顔を近づけた。

「やつ、だめだめっ！ あ……っ!!」

慌てて手で防ごうとしたけど間に合わず、割れ目をべろりと舐め上げられる。寒気のような震えが全身に広がり、私は背中を反らせて声を上げた。

光琉さんはそのまま強引に割れ目をこじ開けて、中の襞にまで舌を這わせる。そんなところを舐められると思っていなかった私は、驚きと快感にさらされ、震え続けることしかできない。

「ひ……あ、あああ」

秘部に口づけるなんて汚くていけないことなのに、ひどく気持ちよくてぼーっとしてくる。

いじられることで鎮まると思っていた疼きはさらに激しくなり、全身が痙攣し始めた。

「あ、あ、なんか、変なの、やだあ……っ」

お腹の奥が、かあつと熱くなる。初めての感覚にどうしたらいいのかわからない。

光琉さんは混乱する私を無視して、秘部への愛撫を続けた。

まんべんなく全体を舐めて、時折、太腿の内側に口づける。私の息が上がり、ぐったりするのを待っていたように、弛緩した割れ目の奥へと指先を進めてきた。

そこがすっかり濡れてぬるぬるしているのは、見なくてもわかる。一瞬ピリッと痛んだけど、私の身体は彼の指を抵抗なく受け入れた。

「ああ……なか、に……」

「うん。痛くない？」

光琉さんは顔を上げないまま聞いてくる。彼の声と吐息で秘部が震え、淡く甘い感覚が響いた。カクカクと首を縦に振って、痛みがないことを伝える。ただ異物感が強くて、とても気持ちがいいとは言えなかった。

少しの間じっとしていた彼の指が、静かに内側を探りだす。

一度、ぐるりと指をまわして内壁をなぞり、ゆっくり引き抜いたあとまた戻ってきた。

「うー……」

反射的に呻き声が出てしまう。指を抜き挿しされるたびに、ゾワゾワした不快感に襲われ、肌が粟立った。

たぶん光琉さんには、いまの私の状態がわかっていているんだろう。彼は小さく「ごめんね、少しだけ我慢して」と呟いて、また秘部を舐め始めた。

「ん、ああ、んっ」

外の快感と、内側の違和感が混じり合い、わけがわからなくなる。

混乱のなかで喘いでいると、光琉さんの舌先が割れ目の手前にある突起をかすめた。

「ひっ!!」

電流のように鋭い感覚が走り、声が裏返る。ひくひくと下腹部がわなないて、なかにある光琉さんの指をギュッと締めつけた。

じわじわとお腹の奥のこわばりが解けていくのに合わせて、未知への恐怖がせり上がってくる。

「や、待って。そこ、怖い……」

いままでだって苦しいくらい気持ちよかった。これ以上の快感にさらされたら、自分がどうなってしまうかわからない。

力なく首を左右に振って、やめてほしいとお願する。けど、光琉さんは「大丈夫」と軽く答えて、敏感な突起に吸いついた。

「んあつ、あああ——」

途端に秘部全体がビリビリと痺れます。熱くて痛くて……おかしくなりそうなほど甘い感覚。きつく瞑った目から、自然に涙がこぼれ落ちた。

首を反らして震えているうちに、瞼の裏が輝き始めた。目を閉じているはずなのに、まぶしさが

どんどん増していく。

やがて意識が光に呑み込まれた瞬間、身体のかなかに渦巻いてた感覚のすべてが弾け飛んだ。

「あ………っ!!」

細く高い叫びが私の口から上がる。声が途切れるのと同時に、全身の力がガクツと抜けた。

自分で自分がどうなったのかわからない。とにかく息苦しくてだるくて、私は全身を投げ出し、必死で呼吸を繰り返した。

ふと我に返ると、持ち上げられていたはずの右足が下ろされている。

のろのろと瞼を開けて、光琉さんを見ようとしたりけど、先に彼の大きな手で目尻を拭われた。

「上手にイケたね」

「……え………?」

朦朧としたままの私には、光琉さんの言う意味が理解できない。

彼は私の頬を撫でながら、ふふっと小さく笑った。

「気持ちよくなりすぎるとそうなるんだよ。イクって聞いたことない?」

「あ、さっきの、が………?」

「そう。花奈の色っぽい声が聞けて俺も嬉しいよ」

光琉さんの指摘で、一気に頬が熱くなる。エッチなことをしているんだから、いやらしい声が出るのは当たり前なんだろうけど、やっぱり平気ではられない。

まともに彼の顔が見られなくて目をそらすと、かすかに溜息を吐く音が聞こえた。

「……本当に最後までするの?」

ためらいが含まれた光琉さんの問いかけに、パツと目線を戻した。

「これで終わりなんてやだ! どうしてそんなこと言うの!?!」

感情に任せて彼を睨む。

光琉さんは少し気まずそうに自分の髪を掻き上げた。

「いや、まあ、ここでやめるって言われたら俺もつらいんだけど……花奈は初めてだから、たぶん痛いと思う」

「そ、そんなの、最初から覚悟してるもの」

初体験に痛みや出血が伴うということは知っていた。全然怖くないとは言えないけど、きっと光琉さんとなら我慢できるはずだ。

私のまなざしを受け止めた光琉さんは、まっすぐに目を合わせてくる。

「きみのなかに出すよ?」

「あ………」

なにを? なんて聞かなくても、光琉さんの言っていることはわかる。妊娠するかもしれないと考えた途端に、お腹の奥がどくりとうねった。

治まりかけた鼓動が、また激しさを増す。

私は一度目を瞑ったあと、光琉さんを見つめ直し、両手を彼へと伸ばした。

「光琉さん、好き」

「花奈……」

わずかに目を瞠みはった光琉さんは、続けて困り顔で微笑ほほえんだ。

「まったく。きみには敵かたわないな」

彼がなにを言いたいのかはよくわからないけど、とりあえず私の想いは伝わったらしい。

光琉さんは私の手を取って甲に口づけると、サッと自分のパジャマを脱ぎ捨てた。

程よく筋肉のついた身体に目を奪われる。首から肩、二の腕、胸板……女の私とは違うシャープなラインにドキドキしてしまう。

彼の裸に見惚みとれているうちに、私の両足はまた大きく開かれていた。

覆おほいかぶさってきた光琉さんが、頬に口づける。同時に秘部の割れ目をなにかで軽く押された。

太くて、なめらかで、ひどく硬い。驚いてそれに目を向けようとしたけど、光琉さんがびつたりと身体を合わせているから見えなかった。

「なに？ この硬いもの」

「またそういうことを言つて、俺おれを煽あほるんだから。本当に花奈はいけない子だ」

呆あきれたような光琉さんの咬くちやぎに、首をひねる。なにか勘違いをされている気がするけど、訂正する前に謎の硬いもので、ぐぐつと割れ目を開かれた。

それは髪ひたを掻かき分けて、さらに奥へ入つてこようとする。狭い入り口を強引に押し開かれて、鋭すばい痛みが走った。

「あ、いっ！」

痛みを声を上げたところで、秘部に当てられたものの正体に気づく。予想もしていなかった硬さと太さに軽くパニックを起こした。

「やあ、嘘。おつきい、よ……！」

ギュッと顔をしかめて、感じたままを声に出す。すぐそばで光琉さんが盛大に溜息ためいきを吐いた。

「ああ、もう……少し黙つて」

そう言われた途端とたんに、キスで口を塞ふさがれる。投げ出していた右手に彼の左手が重ねられ、きつく握り締められた。

「んーっ、ん、んうー！」

言葉は出なくても、呻うめき声が漏もれてしまう。

光琉さんによつて暴あほかれていく内側は、痛いというより、ひどく熱く感じる。まるで火傷やけどをした時のような痺しびれと、強い圧迫感を覚えて、私はポロポロと涙をこぼした。

ゆっくりゆっくりと進んできた光琉さんが、最後にぐつと深く腰を沈めて止まる。彼は顔を離して、苦しげに息を吐いた。

「全部、入った……。ごめんね、花奈。……痛いよな、ごめん」

光琉さんは浅い呼吸の合間に、しつこく謝罪を繰り返す。でも、謝られるようなことじゃないから、首を横に振った。

「お腹いっぱい、苦し、けど、いいの……」

もつと平気なふりができればいいのに、涙交じりの声しか出せない。

私のなかを隙間なく埋めた彼のものは、信じられないほど熱くて硬くて、触れ合う部分がビリビリと痺れている。とても「大丈夫」とは言えなかった。

光琉さんは劣るように私の髪を撫で、額や臉にそっとキスを落とす。優しい仕草に誘われて見詰め合うと、ふっと苦しさがやわらいだ。

いつもの穏やかな光琉さんからは想像できないほどの色気を感じる。欲望にまみれて輝く彼の瞳を見ているうちに、下腹部がむずむずしてきた。

繋がっただけでは足りない、と身体が訴える。

……もつと光琉さんに気持ちよくなってもらいたい。どんなふうにされても、そのせいで身体がつらくなっても平気……

きつと、彼への愛情と本能がそう思わせているんだらう。

私は空いているほうの手で光琉さんの頬に触れて、微笑みを浮かべる。それに合わせて、立てた膝で彼の下半身をキュッと挟んだ。

「光琉さん、もつと、して?」

「え、だって、まだ痛むだろう?」

光琉さんはあからさまに驚いて、目を見開く。けど、ためらう言葉とは裏腹に、私と繋がっている部分は先を期待しているように震えていた。

私は彼を安心させるために、ゆるゆると頭を横に振る。

「もう、平気だから。ちゃんと最後までしてほしいの。……光琉さんの、本当の奥さんになり

たい」

重ねたままの右手を握り直すと、光琉さんはせつなそうに目を細めて小さくうなずいた。

「わかった。ゆつくり、少しずつ、ね」

彼はまるで自分に言い聞かせるみたいに呟いて、上半身を起こす。そして、握っていた私の手を離し、自分の肩へと導いた。

「ここか、首か腕でもいいから、掴まっついて。つらい時は引っこ掻いたり、叩いたりしていいよ」「え……あつ」

そんな乱暴なことほしなと言いかけたけど、胸の膨らみから甘い感覚が湧き上がったのに驚いて、言葉にできなかった。

見るとそこに光琉さんの手が触れている。どうしていまさら胸をいじるのか理解できず、彼に目を向けると、笑みを返された。

「花奈に負担をかけて、俺だけよくなるのはいやなんだ。痛みを取ってあげるのは無理だけど、できるだけ忘れていられるようにね」

「光琉さん」

心が温かくなる。本当に大切に想われていることがわかって、また泣いてしまいそうになった。

光琉さんは手のひらで私の乳房を柔らかく捏ねながら、先端を摘まむように刺激してくる。胸への愛撫につられて秘部がヒクヒクとわななき、埋められた彼のものに吸いついた。

続く快感に浮かされ、だんだんと痛みが遠のいていく。いつの間にか光琉さんが腰を揺らしてい

たけど、ヒリヒリするだけで苦痛には感じなかった。

「あ、あつ、光琉、さん……好き」

彼が奥まで入ってくるたびに、私の口から喘ぎが漏れる。

始め、もどかしいほどゆっくりだった抽送は、しだいに速さを増して、気づけば全身が揺さぶられるほど激しいものになっていった。

光琉さんの肩をきつく掴んで、突き立てられる楔を受け止める。たぶん爪が食い込んでいるだろうけど、彼にすがつていなければ耐えられない。

なかを擦られることで起きる痺れと熱さ……そして無視できないゾクゾクした感覚に翻弄される。もうなにも考えられずに、私はただ震えながら声を上げ続けた。

「ああ、あー、んあ、あ、あああ……」

私のはしたない声と、抽送に合わせた水音が重なる。全力疾走した時のように心臓がドキドキして、息が切れ、朦朧としてきた。

一度、両手を離れた光琉さんが、私の太腿をかかえ上げる。彼はかすれた声で「ごめん」とささやいてから、ガツガツと腰を打ちつけ始めた。

いままでよりもつと奥に彼のものが入り込み、目の前に星が飛ばぶ。

「あ、あつ……!!!」

痛いのか、気持ちいいのかもわからない。混乱する頭のどこかで『もうだめ』と悟ったのと同時に、光琉さんが低く呻いた。

「ん、くつ、花奈……!!」

彼の身体がギュッとこわばり、私のお腹の奥に新たな熱が広がっていく。

突然放たれた熱さに驚く間もなく、光琉さんに思いきり強く抱き締められた。

「……はー……花奈のなか、気持ちよすぎる」

「え？ 光琉、さん？」

「もう少し我慢できると思っていただけだなあ……」

独り言のような呟きを聞き、彼が達したのだとわかった。お腹のなかに広がった熱の正体にも気づいて、かあつと顔が火照る。

先に『なかに出すよ』と宣言されていたから驚くことではないのだけど、嬉しくて、それでいて少し怖いような、不思議な胸の高鳴りを覚えた。

光琉さんの首に腕をまわして、抱き締め返す。

「嬉しい。ありがとう、光琉さん」

胸の奥から湧いてきた想いを口にする、彼は驚いたように「えっ」と声を上げた。

「お礼を言うのは俺のほうだよ。きみの初めてをもらったんだから。……まあ、花奈の積極的なところにはちよつと驚いたけど」

「う……」

茶化すようにクスクスと笑われ、言葉に詰まる。

光琉さんとエッチをして身も心も彼の妻になれたことは本当に嬉しいし、少しも後悔していない。



けど、裸になつたうえ彼を押し倒して迫るなんて、いくらなんでもやりすぎだ。いまさら我に返つた私は、恥はずかしさで身をすくませた。

穴があつたら入りたいというか、逃げて隠れてしまいたいけど、光琉さんと抱き合つた状態では難しい。なにより、私のなかにまだ彼がいた。

「あの、もう、離れたほうがいい、よね……？」

はつきり『抜いて』とは言いづらくて、つい問いかけてしまう。

パツと顔を上げた光琉さんは、心配そうに私を見つめてきた。

「苦しい？」

「え、ううん。大丈夫だけど……」

相変わらず異物感はあるものの、それを不快だとは思わない。光琉さんの一部だと思えば、愛おしく感じる。

しかし、身体を開かれたままというのは、どうにも落ち着かなかつた。

私の返事を聞いた光琉さんは、ほつとしたように息を吐いた。

「よかつた。ちよつと自重じじゆうできなくて、花奈に無理をさせてしまったね。いまさら謝つても済むことじゃないけど……ごめん」

「あ、いいの。確かにその、いろいろとびつくりしたけど、嬉しかったし。光琉さんのこと、大好きだから」

申しわけなさそうにしよげる光琉さんに向かつて、私は平気だと言葉を重ねる。

本当に大丈夫だと証明するために微笑ほほえんでみせると、繋がつたままの彼のがピクツと跳ねた。

「んっ、光琉さん……？」

敏感びんかんな内壁は彼のわずかな動きも察知してしまう。思わず彼の名を呼んで身じろげば、秘部ひぶから卑猥ひわいな水音が上がった。

そこは私のなから溢あふれた蜜と、光琉さんが放つたもので、ビショビショになっているんだろう。当然のなりゆきだけど居たたまれない。ギョツと目を瞑つむり、身を縮めて恥はずかしさをやりすごうとしたところで、お腹の奥の異物感がさつきより大きくなっていることに気づいた。

「あっ、なに、これ」

なんだか妙にゴツゴツしているような？

慌あわてて目を見開いた私の前で、光琉さんが困つたように眉尻まゆしりを下げていた。

「……んー、あのさ……もし、花奈が大丈夫ならだけど……もう一回、いける？」

「え、嘘うそ。えっ？」

あまりにも予想外な提案にギョツとする。

驚おどきで固かたまっているうちに、光琉さんがゆるりと腰をまわした。

「これ、痛くない？」

「ああんっ」

私の喘あえぎと、粘ついた水音が重なり、じんわりと甘苦しい感覚が広がる。

光琉さんは「痛むならやめる」と言つて気遣つてくれるけど、私が痛がついていないのは身体からだの反

立ち読みサンプル  
はここまで

応でバレバレだった。

「やあ、だめえ。もう無理だから……あああつ……!!」

痛みがなくても、気持ちよすぎて苦しい。

施される愛撫に翻弄されながら、何度か「無理だ」と伝える。でも、いやらしい声が交じっているのは説得力がないのか、光琉さんは止まってくれなかった。

結局、彼がもう一度満足するまで行為は続き、体力の限界を超えた私は、なかば気を失うようにして眠りに落ちた。

\* \* \*

俺——梶浦光琉はラグの上で寝入ってしまった妻の花奈を抱き上げ、そつと寝室へと運ぶ。起さないうちを気をつけながらベッドに寝かせて、彼女の身体を清めることにした。

少し熱めのお湯にタオルを浸して、汗や他の汚れを拭き取っていく。

初めてのセックスで疲れきっているらしい花奈は、目を覚ます気配さえない。ここまで無理をさせてしまったことを申しわけなく思う反面、彼女の身体を手に入れたという喜びを覚えた。

「可愛いな……」

ひとりごちてから少し足を開かせて、付け根に優しくタオルを押し当てる。

敏感な場所だから、さすがになにかを感じ取ったらしく、花奈がわずかに眉根を寄せて身じろぎ

した。

自然と肌を粟立たせ、ピクピクと震えるのがなまめかしい。さつきまでの彼女の痴態を思い出しそうになり、俺は静かに頭を振った。

「まずいな。年甲斐もなく二度もしたのに」

秘部に当てたタオルをそのまま少し置き、汚れを吸い取らせる。外して視線を向けると、白い生地は薄く色がついていた。

きつと純潔の証だ。処女性にこだわりなんでもないが、やはり彼女に触れたのが自分ただひとりだと知るの嬉しい。

浅ましい独占欲だと気づいていても、心が沸き立つのを止められない。

俺は、花奈には絶対に見せられない悪い笑みを浮かべたあと、替えのパジャマを出して彼女に着せた。

ベッドの枕元に寄り添い、眠る花奈の顔を覗き込む。

なんて愛らしいんだろう。ずっと欲しいと思っていた彼女が、いま俺の隣にいて信じてられない。心の底から幸せだと感じた。

時間の感覚が危うくなるほどかなり長い間、夢心地で花奈を見つめ続ける。が、やがて唐突な不安感に襲われた。

いまの彼女は俺の説明を鵜呑みにして、自分が普通の妻だと信じきっている。俺たちが結婚した本当の理由も、俺との関係も、すべて忘れたままで……